
人間の相互関係解明への科学者集団の 形成に向けて

—— 「社会学23」講座の開設 ——

吉原 正彦*

第1節 はじめに

第4節 10月3日の「社会学23」講義

第2節 「社会学23」講座への道

第5節 結びにかえて

第3節 「社会学23」講座の開設

第1節 はじめに

1930年代のハーバードに形成された科学者集団、その中核的役割を果たしたのは、L. J. ヘンダーソン (Lawrence Joseph Henderson 1878-1942) であった。ヘンダーソンは、1927年にV. パレートの『一般社会学概論』に出会い、それまで懐疑的であった社会科学の成立可能性を確信した。「パレート社会学」を啓蒙すべく彼は、1932年に創設まもない社会学科で「パレート・セミナー」を開設し、自ら『パレートの一般社会学』を著して、人間と人間が織りなす相互関係への科学的解明の道を歩み始めた。そして彼は、社会学者として正念場ともいえる「社会学23」講座を開設することになるのである。

問題は、この「社会学23」講座がいつ開設されたか、である。

C. I. バーナードは、ヘンダーソンの遺稿に寄せた長い序文で、「社会学23は、半ば実験的であった。それは履修単位として認められておらず、学生が選択することに関してまったく随意的し自由であった」とし、「この講座は、ハーバード・カレッジで、1937-1938、1938-1939、1939-1940、1940-1941の学期年度に行われた。それは1941-1942に始められたが、ヘンダーソンの死によって終了した」と述べている¹⁾。バーナードの理解では、「社会学23」の開設は、1937年-1938年の学期年度である。

また、B. バーバー (Bernard Barber) は、「ヘンダーソンの社会学23は、1938年の春に初めて行われた。それは主に学部学生のためであったが、若干の院生、そして古参の教員も時々出席をした。彼は、1942年の死までこの講座を行い続けた。初めの年、この講座のティーチング・アシスタントはジョージ・ホーマンズであった。最初にヘンダーソンは、この講座を

1) Chester I. Barnard, "Introduction," in *Introductory Lectures in Concrete Sociology*, by L. J. Henderson, unpublished typescript, edited by C. I. Barnard. p. 37 and p. 42.

※青森公立大学

『実験的』と明確に名付けた」²⁾とし、「社会学23」の開設を、バーナードと同じ年度としている。

バーナードは、1937年の出会い以来ヘンダーソンと懇意になり、1942年の彼の死後、ヘンダーソンの「入門講義」を出版すべく彼の著作を読み、ハーバードのベイカー・ライブラリー・アーカイヴズにある資料を精査し、さらに当時の関係者からも話を聞いていた。また、バーバーはアメリカの社会学者の第一人者であり、ハーバード・カレッジに在籍した折、「最初に行われた1938年の春に」この講座を履修した当事者であり³⁾、ヘンダーソンの「社会学23入門講義」を含む論文集を編んだ人物である。

そうしたバーナードとバーバーである。彼らが示したように、ヘンダーソンの「社会学23」講座の開設を1937年-1938年とするのは、誰しも確かなことのように思われる。

事実、アメリカのヘンダーソン研究の第一人者であるJ. パラスキャンドラ (John Parascandola) は、その学位論文において、1932年のパレート・セミナーの「数年後、彼は『具体社会学』と題した社会学23の別のセミナーを加えた」とし、その根拠をバーナードに求めている⁴⁾。「数年後」として時期を明確にしなかった彼は、その後、『ハーバード大学の科学 — 歴史的展望 —』にヘンダーソンに関する論文を寄稿し、1932年の「6年後に、彼は『具体社会学』と題する別のセミナーをつくり、主に学部学生を狙いとした」と述べ、その根拠をバーナードとともにバーバーに求めている⁵⁾。パラスキャンドラのいう「6年後」とは、1932年を基準としているから、1938年ということになる。そしてわたくしもまた、過去のヘンダーソン研究において、この講座が「1937年から始められた」と述べ、パラスキャンドラと同様に、バーナードにその根拠を求めているのである⁶⁾。これまでの研究者はすべて、これらの根拠に従っていたといえる。

しかし、わたくしが実際にベイカー・ライブラリー・アーカイヴズを訪れ、ヘンダーソンに関する資料を検討してみると、「社会学23が1937年-1938年に開設された」のは、事実と異なることが判明した。

本稿の目的は、このこと、つまり「社会学23」講座がいつ行われたか、を明らかにすること

2) Bernard Barber, "Introduction," in *L. J. Henderson on the Social System: Selected Writings*, edited by Bernard Barber, The University of Chicago Press, 1970. p. 40.

3) *Ibid.*, p. vii.

4) John L. Parascandola, *Lawrence J. Henderson and the Concept of Organized Systems*, unpublished dissertation, University of Wisconsin, Madison, 1968. p. 19 and p. 196.

5) John L. Parascandola, "L. J. Henderson and the Mutual Dependence of Variables: From Physical Chemistry to Pareto," in *Science at Harvard University: Historical Perspectives*, edited by Clark A. Elliott and Margaret W. Rossiter, London and Toronto, Associated University, 1992. p. 183 and p. 190.

6) 吉原正彦「L. J. ヘンダーソン研究序説——ハーバードにおける活動の軌跡——」『千葉商大論叢』第14巻・第3号, 1976年12月. 257頁.

とにある⁷⁾。

第2節 「社会学23」講座への道

1935年の秋、ヘンダーソンは、イタリアの友人に宛てた書簡のなかで次のように述べている⁸⁾。

わたくしのパレート社会学セミナーは、ちょうど4年目に入ろうとしています。今のところ、何名が参加するかわかりませんが、関心がこれまで以上に高いものであることは確かなようです。これは疑いもなく、英語訳版が出たことによるものです。今年は、もう一つのセミナーが、ある社会学的探求の方法と成果に基づいて始まろうとしており、それを支えているのはParetianであると考えています。いずれにしても、厳密な論理 - 経験の立場を堅持しようとする限り、そのセミナーを指導する責任を共有し合う8名ないし9名に課された絶えざる重圧が、まだまだ続くでしょう。

4年目を迎えようとしている「パレート社会学セミナー」とは、1932年に開設され、大学院の学生を対象とした「パレートおよび科学的探求の方法」を主題とする「パレート・セミナー」である⁹⁾。

問題は、今年始まろうとしている「ある社会学的探求の方法と成果」に基づく「もう一つのセミナー」である。

ヘンダーソンは、パレートの『一般社会学概論』に出会ってから8年となり、「パレート・セミナー」の3年間でメイヨー、シュンペーター、ブリントン、パーソンズ、レスリスバーガー、ホームズなど、同僚や若手研究者と研究を深めていくとともに、次第に科学者集団を形成し始めていた。彼は、これを基盤としてさらにパレート社会学を啓蒙し、とくに若手に浸透させることが必要であることを痛感していた。もちろん、パレート社会学をめぐる当時の評価は、彼にとって決して望ましいものではなかった。大学内部でも社会学科を中心にヘンダーソンの考えを理解しない人が少なからずおり、彼が行おうとしていることは、既存の社会学科の枠組みを少なからず揺るがすものでもあった。

7) 本稿の執筆動機の一つは、加藤勝康教授の教えである。わたくしは、過去において、バーナードとヘンダーソンが初めて出会った時期を、W. B. ウォルフの見解をもとにして、「1936年1月頃」とした。しかし加藤教授は、そうした曖昧さを排除し、その出会いの正確な月日を求めるために苦勞をされ、「1月22日」と特定化された。そしてその事実を基礎として、バーナードの組織観の変遷を解明されておられる。同稿、260頁。W. B. Wolf, *The Basic Barnard: An Introduction to Chester I. Barnard and His Theories of Organization and Management*, Cornell University, 1974. p. 19. 日本バーナード協会訳『バーナード経営学入門——その人と学説——』、ダイヤモンド社、1975年、53頁。加藤勝康『バーナードとヘンダーソン——*The Functions of the Executive*の形成過程——』文眞堂、1996年7月刊行予定。

8) Letter from L. J. Henderson to A. de Pietri-Tonelli, Sept. 26, 1935, Henderson Collection Folder 14-1, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

9) 吉原正彦「科学のもつ一般性の追求——ヘンダーソンのパレート・セミナー開設と『一般社会学概論』の英語訳版——」『青森公立大学経営経済学研究』第1巻・第1号、1996年3月、54頁。

ヘンダーソンは、1934年の冬、ハーバード・カレッジのディーンであるK. B. マードック (Kenneth Ballard Murdock 1895-1975) に宛てた書簡で、社会学について次のように述べている¹⁰⁾。

「一般社会学」と称されるような主題が科学を構成し、この科学が歴史学、政治学、経済学、法律学、教育学などの基礎の一つとなる時が到来することをわたくしは確信しています。今行われている方向に沿っていくことは、学部学生を傷つけ、院生を困難な立場に追い込み、この方向での進展を困難にさせるという理由で、有害であることがはっきりしています。

たとえば、われわれが、コンラッド・アレンズバーグ (Walter Conrad Arensberg 1878-1954) やジョージ・ホーマンズに期待するのと同じように、3年ないし6年になる若手研究者に対してふさわしい職を見つけることを困難にしています。

それゆえに、本学の公衆衛生大学院のE. B. ウィルソン (Edwin Bidwell Wilson 1879-1964)、神学大学院のノック (Arthur Darby Nock 1902-1963)、経営大学院のメイヨー、それにわたくしの四人は、それぞれ異なる立場から、現状認識と見通しについてある程度完全に一致しています。われわれは、みな先入観を持った人間でしようし、間違っているだろうということを承知の上で、経営執行部はわれわれの見解を考慮に値すると考えているようです。

ここにいう「一般社会学」の「社会学」とは、「二人ないしそれ以上の人々の相互関係」の研究を指し、「一般」とは、社会科学を中心とした歴史学、文学、経済学、社会学、法律学、政治学、神学、教育学などを含み、それらの学問領域に共通していることを意味する。「一般」の「社会学」である以上、自ずと抽象度が高く、そのものとしては具体性に乏しいものであることはいうまでもない。しかし、それゆえにこそヘンダーソンは、「一般社会学」が人間の相互関係を扱うすべての学問の基礎たりうると考えたのである。

ヘンダーソンがすべての学問の基礎として「一般社会学」を大学院だけではなく、カレッジ・ディーンのマードックに宛てた書簡から明らかなように、学部まで広めようとするのは少なくとも二つの狙いをもっていった。第一に、彼のパレート社会学の研究が示すように、院生および学部学生に科学的なものの見方、考え方を徹底して植え付けようとするものである。第二に、第一と関連するが、ホワイトヘッドのいう「取り違えた具体性の誤謬」に陥らせないこ

10) Letter from L. J. Henderson to Kenneth B. Murdock, Dec. 19, 1934, Henderson Collection, Folder 9-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

とである。ヘンダーソンは、従来の学問領域をすでにあるもの、固定されたものとして捉えることが、ますます専門分化されていく傾向と相まって具体的な現実を忘れてしまうことを危惧した。彼は、これを避けるために、従来の学問の垣根を取り払い、社会科学に共通する「一般」から「具体」の世界を捉えようとし、もって学際的研究の道を拓こうとしていたと考えられる。

学問領域を異にしているウィルソン、ノック、メイヨーたちがヘンダーソンの考えを共有していたことは、当時のハーバードがそのようなことを抱かせる状況にあったといえよう。もちろんわたくしは、当時のハーバードの状況を明確に示すことはできない。しかし、「パレート・セミナー」が行われていた社会学科の若干をうかがい知ることができる。

すでに述べたように¹¹⁾、ハーバード大学の社会学科は、1931年にソロキンを学科長として創設された。社会学科は、隣接分野からの協力を得て、最初から学際的な研究を可能とするような講座が設けられ、しかもローウェル総長の意向にしたがって、科学的研究を志向するものであった。

しかし、実際は理念とは異なっていたようであり、社会学科の改革が求められ、ソロキンは自らの改革案を提示していた。この提案に対してヘンダーソンは、「有益な意見をほとんど表明できない」と直接答えずに、「もし社会学を、もっとも一般的な方法で、同じ種の個々の有機体の間、とくに個々の人間の間、の諸関係にかかわり、そしてこれらの関係から生ずる総合的な活動にかかわる科学として考えるならば、当然のごとく社会学は、化学が生物学に持つのと同じように、歴史学、政治学、経済学、法学などと幾分かのつながりを有している、ということが心に浮かびます。わたくしの印象では、この見解は、考えられ得る唯一のものではないでしょうが、必然的なものであり、それゆえに社会学科と他の学科との関係が、大学の政策の重要な課題を意味するものです」¹²⁾と述べた。

社会学科では、他の学科に所属している講義担当の教授も社会学科の定例会議に出席して投票権を有していたのであり、当然ヘンダーソンも参加していた。しかし、パレート社会学をめぐる問題にみられるように¹³⁾、ヘンダーソンとソロキンとは社会学に対する基本的考えが異なっていたようであり、したがってまた社会学科の教育方針についても意見を異にし、他の社会学者とも相違があったと思われる。

ヘンダーソンは、学科会議に出席した経験から、彼らの意見を変えることが困難であることを同じ社会学科の同僚に述べ、その理由として二つの点を挙げている¹⁴⁾。第一に、経済学者以

11) 吉原正彦、上掲稿、52-54頁。

12) Letter from L. J. Henderson to Pitirim A. Sorokin, March 14, 1934, Henderson Collection, Folder 16-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School. ソロキンが提案した社会学科の発展に向けた15年計画といわれるものは、5頁にわたるものであるが、内容は教員の増員、資金の要求、奨学金の確立などであり、どのようなヴィジョンに立っているのか、またそれに基づく教育の方法が示されていない。

13) 次を参照されたい。吉原正彦、上掲稿、57-59頁。

上に社会学者は、事実と理論の区別、論理と合理化の区別をしていないこと、そのことのゆえに、会議が正しい方向に有効的に動いていないのである。第二に、第一と同じ要因に基づき、心理学、社会学、倫理学、美学などを教えるにあたって美辞麗句による習性が、未熟な学生に対して、科学として考えられるものを惑わすことである。社会学や心理学の分野の研究者は、観察よりも感情を、論理よりも感情の結合を、そして厳密な陳述よりも修辭的な利点を好んでいるのである。

こうした情況は社会学の歴史の結果であり、彼らが受けた教育の結果なのであり、この情況の改革はパレート社会学への接近によって可能となる、とヘンダーソンは考えた。彼は、社会学者を中心とした知識人の間には、パレートが試みようとしたことや行ったことに対して誤った認識があるとする。それゆえ彼は、社会学を研究している人々の幾人かに対して、こうした態度を変えようと試み、また新たに試みようとしていたのである¹⁵⁾。

そして社会学科が創設されて5年目に、社会学科を検討する委員会 (the Committee on Honors) が改革案を示している。その委員会の構成員には、ヘンダーソンの他、次のハーバード大学総長となるコナントもいた¹⁶⁾。

社会学科の主要な狙いの一つは、さまざまな社会科学が会う場とすることにあつた。このことは満足のいくように運営されつつあつたが、学科目の試験のために、学生の注意が個々の講座内容のみに向けられており、その狙いが十分に生かされていないのである。また、ローウェル総長が導入した学生へのチューター制度は、十分に機能していない。なぜならば、学生の研究が専門化されているために、彼らにチューターからの指導が適切に受け入れられていないのである。

委員会は、このような問題を解決するための改革案として、新たな試験制度を提案している。それによると、試験は3段階に分かれており、「試験A」では、社会学の領域の全般的にわたるものであり、理論の強調を少なくし、直接の経験上の問題に重きを置くものである。「試験B」では、社会学分野の専門化された領域であるが、狭い技術的な事柄よりもより広い一般的な側面に向けられる。「試験C」は、社会学と隣接諸科学を利用しうる特殊な領域において行われ

14) Letter from L. J. Henderson to E. F. Gay, Jan. 11, 1935, Henderson Collection, Folder 5-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

15) Cf., letter from L. J. Henderson to Robert E. Park, March 7, 1935, Henderson Collection, Folder 14-9, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

16) 他の構成員としては、ノック (Nock)、シェイプリー (Shapley) とウィルソン (Wilson)、そしてグリーン (Greene)、ランド (Land) がいた。この報告書は、1936年5月12日付で示されている。“Tercentenary Meeting Executive Committee,” Henderson Collection Folder 17-6 in Baker Library Archives, Harvard Business School.

るものであった¹⁷⁾。

改革案では、各講座が専門性重視ゆえに境界がはっきりと決められ、講座間の有機的関連性よりも個々の独立性の中で教えられ、試験が行われていることが批判されている。そのような試験を通してくる学生は、個々の切り離された領域のみに眼を奪われることによって現実の具体的な世界を忘れ、いつの間にか具体的な現実を切り捨てた机上のものとして科学を捉え、「取り違えた具体性の誤謬」に陥ることになる。それゆえに、社会学科の原点に立ち戻り、さまざまな社会科学が行き交い、出会う場としての社会学科のあり方を提示しようとしたものと思われる。

このような改革案の意図は、ヘンダーソンが「一般社会学」という名の下に目指そうとしていたことと基本的に一致する。もちろん、ともに容易に実現できるものではないことも一致している。教育の問題は、制度上の問題、それを支える人々、講座を担当する教員の態度と能力にかかっているからである。

そして彼は、その改革案の提出に先だって、社会学科での基礎中の基礎として「社会学23」の開設に向かっているのである。

第3節 「社会学23」講座の開設

1935年の2月、ヘンダーソンは、社会学科長のソロキンに宛てて次のように述べている¹⁸⁾。

わたくしは、すでに提案していたセミナーの暫定的な準備を完了しました。この講座の名称は、もし異議がなければ、「ある社会学的探求の方法と成果 (Method and Results of Certain Sociological Investigation)」です。

この講座は、L. J. ヘンダーソンおよびE. メイヨアの両教授によって、W. ロイド・ウォーナー (W. Lloyd Warner 1898-1970)、T. N. ホワイトヘッド、F. J. レスリスバーガーの助教授によって、コンラッド・M・アレンズバーグとエリオット・D・チャップル (Eliot D. Chapple) 博士によって、そしてメサーズ (Messrs)、ソロン・P・キンボール (Solon P. Kimball)、L. スロー (Srole)、W. J. デックソン (Dickson)、そしてジョージ・ホームズによって行われるでしょう。

17) 「試験B」では、「社会学理論と方法論」、「社会構造と制度」、「社会動態と社会変革」、「社会病理学と社会政策」、「試験C」では、「原始人の社会学」、「社会心理学」、「経済生活の社会学」、「政治生活の社会学」、「宗教社会学」、「家族社会学」の科目が挙げられている。なお、当時の科目構成は、「社会理論」、「社会組織と動態」、「社会変革と社会進歩」、「社会倫理学」、「人口問題」、「地域-都市社会学」、「家族」、「社会病理学と犯罪学」、「社会心理学」というように並列的構成であり、改革案にみられるような階層化はもとよりスパイラルによる教育研究の意図がみられない。

18) Letter from L. J. Henderson to P. A. Sorokin, Feb. 5, 1935, Henderson Collection, Folder 16-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

わたくしが考えますに、1週間に2度、各回は1時間30分と決定されるべきでしょう。

このヘンダーソンの書簡に対して、ソロキン学科長は、講座の名称には異論をはさまなかつたものの、若干の事柄を問いただす返事をよこした。その内容を事実と論理に基づくものであるか、それとも感情と合理化とみるかは、興味のあるところである。

しかしヘンダーソンからすれば、このソロキンの書簡から、「一般社会学」構築のなお一層の必要性を読みとることができる。少し長いが、ここで取り上げることにしよう。

あなたが提案されたセミナーの編成と計画内容を大変うれしく思います。名称はまったく満足するものです。しかし、わたくしはあなたと予め話し合っておきたい、いくつかの点があります。

学科会議でも個人的な会話でも、あなたはその講座に対して何も責任を持たず、それを組織し、2、3回の講義をすることに役割を限定する、という事実を強調なさいました。しかしながら、あなたのセミナーの説明には、それを担う責任者の名前が誰も挙げられておりません。もちろん、教務委員会 (the Committee on Instruction) は、セミナーの案内を印刷にまわす前に、それを担う責任者が誰かをわれわれに求めてくるでしょう。したがって、わたくしの最初のお願いは、あなたを除いて、セミナーに責任を持つ教授クラスの1ないし2名をお知らせくださることです。

第二のことはもっと申し上げづらいことです。教授による会議の席上、あなたは、ホームズ氏、ディックソン氏、スロウル氏、キンボール氏が講師になることをおっしゃいませんでしたし、ましてホームズ氏の話題にはまったく触れませんでした。これは、わたくしが考えますに、学科の承認を経ることなく、あなたとわたくしで決めることができないような手続き上の問題をもたらします。

教員となって3年が経つまでは、誰も、博士号をもっている講師でさえも、社会学のどのような講座も単独でもつことは認められていません。もしもあなたが、これら若い人はそのセミナーに単に参加する学生であり、講師の名簿から彼らの名前をはずすことに同意されるならば、われわれは学科会議を招集する必要はありません。しかし、彼らを博士号の取得前に講師として任命することをあなたが推薦なさるならば、この推薦は学科によって正式に認められる必要があるでしょう。このような任命の必然的結果は、課題を徹底的に研究し学位論文に取り組んでいるあらゆる院生が、社会学の講師職を要求する権利を持つことになるでしょう。

もう一つの問題は、まったく明確となっております。ホームズ氏の「13

世紀のイギリス」という論題が、なぜとくにこの学科に提出されるべきなのでしょう。その主題が特定化された社会学的観点から論じられていない限り、むしろそれは歴史学科に提出されるべきであるように思われます。それが本当に歴史的論題であるならば、それを社会学に持ち込むことが、この学科を、その構成員が望む以上に、ゴミ捨て場かなんかに変えてしまうことにわたくしは恐れます。

あなたの協力と他の貢献者の協力に対して心から歓迎し、このセミナーに向けたあなたの準備に衷心より感謝いたしますが、わたくしは、うそ偽りなく率直に申し上げて、まず第一に公の理由から、そして第二に簡潔に示した事実による理由から、この問題をあなたの前に提示しなければなりません。もしあなたが、わたくしの知らない明白な理由や、これらの異議に応えるために学科の他の構成員やわたくしに連絡する時間がなかった明白な理由をお持ちならば、わたくしはあなたに、これらをわれわれに説明されることを求めたいと思います。

そしてあなたが、ホーマンズ氏や他の人々がこのセミナーの講師に含まれるべきであると本当にお考えならば、われわれは社会学の教授による会議を招集しなければなりません。なぜならば、この学科の公式の承認なくしてこのような先例をつくることは出来ないからです。他方において、もしもあなたがこのセミナーの案内にすでにハーバードで未だ教員となっていない人々の名前を講師として含める必要がないという決断をされるならば、わたくしがあなたにお願いする必要なことはただ、このセミナーに、この大学に、この要覧に、そしてわれわれの学科の小冊子に、この講座の詳細な記述に責任を引き受ける人を示していただくことです。もし学科の教授による会議が招集される必要があるならば、あなたをご連絡をくださり次第、わたくしは準備いたします¹⁹⁾。

ホーマンズによると、ソロキンは社会的には魅力ある人物ではあるが、ヨーロッパの大学の指導的立場にある教授の伝統にしたがって、学科長ということから、多少とも専制的であった。しかも、彼の権威主義的傾向は、他の人への嫉妬からますます強まったとされている²⁰⁾。ホーマンズのソロキンへの評価が正しければ、ローウェル総長からの信頼が厚いヘンダーソンに対

19) Letter from P. A. Sorokin to L. J. Henderson, Feb. 7, 1935, Henderson Collection, Folder 16-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

20) George C. Homans, *Coming to My Senses: The Autobiography of a Sociologist*, New Jersey, Transaction Books, 1984. pp. 130-131. ローウェル総長は、ソロキンの経営者的判断をまったく信用していなかったという。そのために、彼は、社会学科の運営を行う委員会を設け、学科の教授以外に、ヘンダーソン、メイヨー、E. B. ウィルソン、E. F. ゲイをその構成員としていたのである。Ibid., p. 131. なお、ホーマンズは、そのとき「ソサイアティ・オブ・フェロウズ (Society of Fellows)」のジュニア・フェロウ (Junior Fellow)の一人であり (1934-1939)、ジュニア・フェロウでいる間は学位請求をできないのであった。Ibid., p. 127. G. C. Homans, *Sentiments and Activities: Essays in Social Science*, New York, Free Press of Glencoe, 1962. p. 6. Cf., *English Villages of the Thirteenth Century*, Cambridge, Harvard University Press, 1941.

して、ソロキンが必要以上に権威主義的態度で接することは想像できそうである。

このソロキンの書簡に対するヘンダーソンの返事は見あたらない。パレート・セミナーに出席したときのソロキンの発言といい、この書簡での彼の主張といい、おそらくヘンダーソンにとって、ハーバードにおける「一般社会学」の構築は、ソロキンが最大の制約要因となっていたのではないであろうか。

このことに関連して、「社会学23」へのカレッジ・ディーンであるマードックの対応をみてみよう。彼は、社会学の新しい講座の担当講師の一人として予定されているディックソンが大学から教員として任命されていないことを知り、法人に働きかけるからディックソンの経歴を教えてください、と尋ねている²¹⁾。ディックソン (William John Dickson) は、ウェスタン・エレクトリック会社の役員であり、1929年から1932年までホーソン・リサーチに従事し、それ以降、会社の命令でハーバードで研究を続け、レスリスバーガーと共同してリサーチの報告書をまとめていたのである²²⁾。

マードックの質問にヘンダーソンは、ディックソンの経歴、人となりを紹介しつつ、これが実現できれば、研究とは違う職務に従事している人間が講師の中にいることは素晴らしいことである、と述べ、彼の申し出に感謝している²³⁾。ヘンダーソンへのソロキンとマードックの対応には、立場が異なるとはいえ、大きな開きがあると思わずにいられない。

「社会学23」講座に対して、マードックの支援がありながらもソロキン学科長の強い異議があったことから、「社会学23」は実際に開設されたのであろうか。それとも延期のやむなきになり、バーナードが述べているように、1937年-1938年に開設されたのであろうか。

1935年-1936年の『ハーバード大学公式登録：社会学科』に、次のようなことが記載されてある²⁴⁾。

社会学23：ある社会学的探究の方法と成果のセミナー、計画として週2回で数時間の予定。

ヘンダーソンとエルトン・メイヨー、T. N. ホワイトヘッドとレスリスバーガーの助教授、そしてディックソン氏。

ホワイトヘッドがこの講座の計画に責任を有する。

21) Letter from K. B. Murdock to L. J. Henderson, Feb. 14, 1935, Henderson Collection, Folder 9-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

22) F. J. Roethlisberger and W. J. Dickson, *Management and the Worker: Technical vs. Social Organization in an Industrial Plant*, Division of Research, Business Research Studies, No. 9, Harvard University Graduate School of Business Administration, 1934.

23) Letter from L. J. Henderson to K. B. Murdock, Feb. 15 and 16, 1935, Henderson Collection, Folder 9-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

24) *Official Register of Harvard University: Division of Sociology*, XXXII, 42, Sept. 18, 1935. p. 45, in Pusey Library, Harvard University.

この『公式登録』には、ソロキンが異議を唱えたホーマンズの名前がない。また、講座の責任を持つものとして、ホワイトヘッドが示されている。

そして、同じ『登録』に、1932年から始まっていた「パレート・セミナー」が、「月曜日、4時15分から6時15分まで」と記載されている²⁵⁾。

こうして「社会学23」講座は、「パレート・セミナー」と平行して、1935年度の学期から正規の授業科目として開設されたのである²⁶⁾。

第4節 10月3日の「社会学23」講義

ヘンダーソン・コレクションに「1935年10月3日に配布された、社会学23クラスの講義」と題する8枚のタイプ原稿が保管されている²⁷⁾。その表題からして、ヘンダーソンは、10月3日に講義を行ったことになる。以下において、その内容をみてみよう。

ヘンダーソンは、最初に、「この講義では、科学方法の一定の諸局面ないし諸要素を論議することに努力を傾ける」と、その狙いを示している²⁸⁾。この言葉からすぐに、「科学方法とは、どのような方法か」が問題になる。「科学はどのようにして構成されていくのか」という過程ないし手続きが問われ、その際の「一定の諸局面ないし諸要素」とは何を指すか、である。

彼は、17世紀の英国の化学者・物理学者であり天文学者でもあるロバート・フック (Robert Hooke 1635-1703) の言葉を引用する。すなわち、「真の根本原理は・・・手と眼から始めることである。そして、記憶を通して先に進み、推理を通して続けることである。決してそこで止まるのではなく、再び手と眼に変わり、一人の研究者から次の研究者へと引き継がれ、活力と強さをもって維持されることである」と²⁹⁾。

25) *Ibid.*, p. 46. したがって、パレート・セミナーが「1934年まで続けられた」とするB. S. ヘイルの見解は誤りである。Barbara S. Heyl, "The Harvard 'Pareto Circle'," *Journal of the History of Behavioral Sciences*, Vol. IV, No. 4, Oct. 1968. p. 318.

26) もちろん、この年の「社会学23」は、「パレート・セミナー」とは異なり、曜日や時間が明記されていない。このことから、実際には行われていなかったのではないかと疑念を持たれるかも知れない。翌1936年-1937年の『公式登録』には、以下のように記載されている。

23^{2hf} Method and Results of Certain Sociological Investigation
Mon. Wed. and Fri. at 2
Henderson, Mayo, Whitehead, Roethlisberger
undergraduates and graduates

Official Register of Harvard University: Division of Sociology, XXXIII, 28, May 29, 1936. p.12, in Pusey Library, Harvard University.

27) "Lecture at class in Sociology 23, delivered October 3, 1935," Henderson Collection, Folder 16-11, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

28) *Ibid.*, p. 1.

29) *Ibid.*, p. 1.

このフックの言葉は、その後の多くの人々によって精緻化され、科学方法の必要にして十分条件を示すものである。とくにポアンカレとパレート、そして実証主義者であるブリッジマンは、科学の記述と科学する人間の活動に関心をもち、こうした記述を作り上げ、活動をする若干の方法をわずかではあるが示した。ヘンダーソンは、フックからブリッジマンや自分の同時代に至るまでのこれらの活動を、科学することの科学研究として記述することが便利であり、非常に間違いのないことであると主張する³⁰⁾。

そこで彼は、フックの規定が科学における事実の性質に注意を向けさせるものであり、事実が視覚ないし触覚という感覚的経験について、およびブリッジマンが操作と呼ぶものについての陳述から構成されている、とする。すべての科学の基礎は、経験と操作から構成される事実である。事実から科学研究は始まり、科学研究が続けられる限り、事実に戻らなければならないのである。

こうした手続きは自然科学では当然のことであり、自然科学者は専門を学習する過程で身に付け、ことさらに意識せずともその手続きを習性として研究を行っていく。もちろん物理学は最初からそうであったわけではなく、今世紀の最初の3分の1は科学的方法を確立するために向けられた。しかしヘンダーソンは、たとえば物理学者が自分の研究分野以外の社会問題に踏み込むと、科学的態度を失い、とくに自分の感情を含む問題を研究するときには、自らの感情が入り込む経験をほとんど避けることができなことを指摘する³¹⁾。

それゆえ、社会現象に対する科学研究においては、科学の基礎となる「事実は、感覚による観察と操作についての陳述であり、観察と操作から他の諸要因を排除することに、そしてその陳述を統語上申し分のないようにすること」が、とくに強調されなければならないのである³²⁾。

ヘンダーソンは、さらに事実について論及し、諸々の事実に通して見出される斉一性もまた事実であるとする。たとえば、「惑星は、太陽の周りを楕円形のように移動する」というケプラーの法則は、数多くの事実にみられる単純な斉一性である。事実は、感覚による観察と操作についての陳述から構成されるが、そうした個々の事実から導き出される斉一性である事実は、どのように導き出されるのか。

ケプラーの法則という斉一性は、ユークリッド幾何学に基礎をおいて記述された諸事実から導き出された。そして、このユークリッド幾何学は、形而上学的な真実として証明できないし、逆に反証もできないことが長い間認識されてきたのである。

ヘンダーソンは、パレートも同じ手続きで残基という斉一性を導き出しているとする。すなわち、パレートは、洗礼に関する具体的現象を取り上げ、人格的統合という感情および人格的

30) *Ibid.*, p. 2.

31) *Ibid.*, pp. 4-5.

32) *Ibid.*, p. 6.

統合が傷つけられたときに回復するという感覚に関するものが人々の間には存在する、という仮定によって記述される共通要素を見出すことが可能であると主張する。この共通要素が残基であり、この残基は、証明ないし反証されなくても、感情についての理論によって述べられた諸事実のなかの斉一性である³³⁾。

事実は、個々の具体的現象から直接に導き出される事実だけではなく、それら多くの事実から見出される斉一性も指す。斉一性を見出すためには、ユークリッド幾何学や感情の理論、という概念枠組みが必要となり、それが証明あるいは反証されなくとも、それによって導き出されたケプラーの法則や残基は事実なのである。したがって、ヘンダーソンは、自然科学と社会科学とは基本的に異なるところがないとする。

彼はこのことを確認した上で、自然科学と社会科学とでは実際の科学手続きにおいて非常に大きな相違があるとする³⁴⁾。ユークリッド幾何学は、われわれの直接の観察内部にある対象に向けられている。他方、パレートの感情に関する理論も観察内部に向けられてはいるが、ある感情と他の感情とを区別することの困難さや感情を厳密に規定することの困難さ、という大きな実際上の困難を伴う。この困難さはその主題そのものの性質に基づくものであり、彼は「もし、これらの相違を受け入れようとしないならば、あなたは社会学のほとんどの問題の研究から手を引くことである」と主張する。

そしてヘンダーソンは、「すべての事実は、ある概念枠組みによって陳述されなければならない。物理学が、どのような概念枠組みの形而上学的妥当性についても証明する試みを捨てているとするならば、社会学にとってこの例に従うことがよいであろう。そして、この局面に関して、物理学者の場合と社会学者の場合との間の相違は基本的なものではなく、手続き上の違いである」と結論づけている³⁵⁾。

以上が、「社会学23」の最初に行ったヘンダーソンの講義内容である。彼が論じた「科学方法の一定の諸局面」とは、科学の基礎としての事実である。事実は感覚による経験と操作によって構成され、これら多くの事実から見出される斉一性も事実である。斉一性は何らかの概念枠組みが不可欠であるが、概念枠組みそのものは真偽の問題ではないのである。

このような事実の理解については、自然科学も社会科学も基本的に同じである。彼によれば、その相違は手続き上の相違であり、社会科学のもつ困難さを乗り越えて科学研究を進めていくことが肝要である、とするものであった。

こうしたヘンダーソンの講義原稿をみると、必ずしもまとまりをもったものとはいえない。また、科学の方法を取り上げたとはいえ、その基礎である事実の性質については論じられてい

33) *Ibid.*, p. 7.

34) *Ibid.*, p. 8.

35) *Ibid.*, p. 8.

るが、どのようにして科学は行われるのか、という過程が明確に示されていないといえよう。ヘンダーソン独自の科学方法の提示には、もう少しの時間が必要となるのである。

第5節 結びにかえて

本稿の目的は、ヘンダーソンの社会科学研究の集大成といわれている「社会学23」講座の開設の時期を問うことであった。

これまでの理解では、「社会学23」講座の開設は1938年であった。その根拠は、最初に述べたように、ヘンダーソンの意思を受け継ごうとしたバーナードと「社会学23」を実際に受講したバーバーに求められたものであった。

しかし、これまでの考察から明らかなように、「社会学23」の開設を1937年-1938年とすることは誤りであり、1935年-1936年の学期年度である。もちろん、わたくしが調べた限り、1935年に開設された「社会学23」がどのような内容であったのかの全貌を示す資料はなかった。残されていたのは、第一回目と思われるヘンダーソンの講義原稿であった。1935年とした根拠は、この講義原稿、『ハーバード大学公式登録』、そして「社会学23」にかかわる書簡である。

ここで指摘をしておくことがある。1935年に開設されたのは「社会学23」ではあるが、その主題が「社会学23：ある社会学的探求の方法と成果」となっていることに注意しておかなければならない。したがって、同じ「社会学23」であっても、W. G. スコット (William G. Scott) が指摘している「社会学23：具体社会学」ではない³⁶⁾。ヘンダーソンが「社会学23」の「ある社会学的探求の方法と成果」を「具体社会学」へと明示的に行っていくためには、科学方法の具体的展開を準備する必要があり、もう少しの時間が必要であったのである。とはいえ、1935年-1936年の「社会学23」講座の開設によって、具体社会学 (Concrete Sociology) への道が切り拓かれていくのである。

人は、「社会学23」の開設が、1938年ではなく1935年と判明したことにどのような意味があるのか、と問うかもしれない。現在のところ、わたくしは、その一つの事実を明らかにすることだけである、と答えておきたい。

(1996年6月28日受理)

36) William G. Scott, *Chester I. Barnard and the Guardians of the Managerial State*, Kansas, University Press of Kansas, 1992. p. 47.